

# 水の哲学

## エンペドクレス 「万物の構成要素は 火と水と土と空気である」

エンペドクレスは紀元前の古代ギリシャの哲学者。シチリア島のアクラガスに生まれ、政治家、医師、科学者、詩人、宗教家などとしても活躍するなど多彩な顔をそなえていた。

哲学的著述として『ペリ・フュセオース』(自然について)と『カタルモイ』(浄め)という詩の断片が遺されている。

### 4元素説による世界観の構築

「万物の構成要素は火と水と土と空気である」は『ペリ・フュセオース』で唱えられ、ディオゲネス・ラエルティオスによる『ギリシャ哲学者列伝』に引用されている。

エンペドクレスによると、万物のリゾーマタ=根源は火・水・土・空気の4つの基本要素で構成されている。これがいわゆる4元素説で古代ギリシャ哲学のビッグネームであるプラトンやアリストテレスにも継承された。

医学の始祖とされているヒポクラテスも4元素説の影響を受けたひとりだ。彼は『人間の自然性について』や『疾病について』などの論考で人間の身体を構成している基本要素は4種類の体液であり、これらのバランスによって健康状態が左右されると述べている。

『ギリシャ哲学者列伝』によると、エンペドクレスは『ペリ・フュセオース』で4つのリゾーマ

タを古代ギリシャの神々にたとえている。

「光り輝くゼウスと生をもたらすヘラ、そしてアイドネウス。さらにまたその涙によって死すべきものどもの生の流れをうるおすネステイス」と。

ディオゲネス・ラエルティオスは「この詩句においてゼウスとは火のことであり、ヘラとは土のことであり、またアイドネウスとは空気、そしてネステイスとは水のことであり」と解説している。

そして「これらのものは普段に交替しつづけて決して止むことがないのだと彼は言って、このような秩序は永遠であるかのように考えているのである」と言及している。

つまり4つのリゾーマタは絶えまなくその位置を交替しながらも、基本的な構成要素は決して変化することがない。それが永遠の秩序をかたちづくっているのだという。



### 愛と争いという2つの力

世界は4つのリゾーマタの交替=分離・結合によって構築されているとエンペドクレスは考えた。たとえば海は水が多く配分されたものであり、火・水・土・空気のそれぞれの配分比率であらゆるものが生成されている。

エンペドクレスのきわめてユニークなところはこうした4つのリゾーマタが愛=ピリアと争い=ネイコスの2つの力によって分離・結合すると唱えたことだ。

世界史は愛と争いによって愛が完全に支配する時期、争いが拡張する時期、愛が拡張する時期、争いが完全に支配する時期の4つに分かれる。そしてこの4つの時期がおなじ順序で永遠に反復するという。

愛と争いはきわめて抽象的な観念だけれども、愛を引力、争いを斥力と言いかえるとわかりやすい。火・水・土・空気という不動の4つの元素が引力と斥力によって分離・結合していく。これは近代科学につながる驚異的な発想といっていだらう。

神秘的なベールをまとったエンペドクレスの世界観はその内実において時代を先取りした科学的思考につらぬかれていた。



### 後世に名を残した劇的な最期

エンペドクレスの最期はひとつの象徴的なエピソードによって後世に伝えられている。

セリヌスという街の近くを流れる河が汚染され、そこから広がった疫病で市民が苦しんでいた。

それを知ったエンペドクレスは私財を投げ打って別の河からきれいな水を汚染された河に引き込み、水質を浄化して疫病を終息させた。

その偉業に対してセリヌスの市民は感謝を込めて祝宴を開き、エンペドクレスを神のように讃え、崇め、祈りを捧げた。

するとエンペドクレスはみずからも神のように振る舞うためにヴェスヴィオスの火山へ行き、噴火口へ飛び込んだという。

その際、サンダルを揃えて身を投げたことから靴を揃えて投身自殺をした史上初の人物として名を残している。

彼には妄想癖があったと指摘されているけれども、靴を揃えるという行為はその死がたんなる衝動から生じたものではないことを物語っている。

エンペドクレスは常人の測りしれない不可解な最期を遂げることによって神々と科学にまたがる独創的な世界観を完結させたのかもしれない。

(高倉)